【377】

| | |
|---|---|
| 氏　名（本籍） | 小澤基弘（愛知県） |
| 学位の種類 | 博　士（芸術学） |
| 学位記番号 | 博　乙　第　2123　号 |
| 学位授与年月日 | 平成17年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第2項該当 |
| 審査研究科 | 人間総合科学研究科 |
| 学位論文題目 | **作品の実現についての考察**<br>－作品制作学の視点から－ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 主　査 | 筑波大学助教授 | 博士（芸術学） | 齊藤泰嘉 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | | 玉川信一 |
| 副　査 | 筑波大学助教授 | 博士（芸術学） | 岡崎昭夫 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | 博士（美術） | 金子一夫 |

## 論文の内容の要旨

**（目的）**

本論文は，作品の実現とは何かを作品制作学の視点から解明することを目的としている。著者が述べる作品の実現とは，作品の物理的完成を言うのではなく，制作者の理念の成就を指す。著者は，実現とは，可視的な個々の物体の完成を目指す作業ではなく，不可視の理念を一連の作品系列において明確化することであるとする。このような作品の実現を志向する制作者は，作品の形式上の完成を度外視するのであり，作品の実現について考察するためには，そのような未完成を繰り返す試行錯誤の制作過程，さらにそこを貫く理念を把握することが必要になる。このような試行錯誤が，制作者にとって否定的な意味を持つのではなく，むしろそこに積極的な意義があることを実証している。

**（対象と方法）**

著者は，作品の完成と未完成の問題を考察する素材として，イタリア・ルネッサンスの芸術家であるレオナルド・ダ・ヴインチやミケランジェロをとりあげている。作品の実現の問題を考察する素材として，19世紀フランスの小説である「知られざる傑作」（バルザック作），同じく画家ポール・セザンヌの作品，さらに20世紀の画家・彫刻家アルベルト・ジャコメッティの作品をとりあげて研究している。また，著者自身の作品の制作過程について，作品の実現という視点から分析している。研究方法は，芸術家の行為や理念について実証的に考察する作品制作学を基本とし，美術史学，美術理論，感覚論，認知科学，現象学，文芸学，実存哲学など幅広く人文諸科学の成果を応用している。

**（結果）**

本論文は，序論のほか，全4章と結論から成る。付録として，参考文献一覧，図版一覧がある。序論においては，研究目的と論文概要が述べられている。著者は，作品の実現の問題について作品制作学的視点から考察するのが研究目的であるとしている。作品の実現という言葉を頻繁に使用したのは画家ポール・セザン

ヌだとし，彼は，自分の芸術理念の達成を実現という言葉に託したが，実際の制作は試行錯誤の連続であったとする。セザンヌと同様に20世紀の画家・彫刻家アルベルト・ジャコメッティも試行錯誤を繰り返していると指摘する。こうした歴史研究を踏まえ，著者自身の実現の問題を考察し，それをセザンヌやジャコメッティと同じ系譜に位置づけている。

第1章「作品の実現に関わる諸問題についての考察」は，作品創造の過程と未完成の問題について論じている。美術史学者ヨーゼフ・ガントナーの提起した芸術における未完成の問題について検討している。作品の完成ではなく，理念の実現を目指す芸術家たちおける主観と客観の関係の問題を視覚と空間の問題へと発展させ，ジョージ･バークリーの視覚論を踏まえ，絵画における空間描出行為の困難さについて分析している。

第2章「バルザックの『知られざる傑作』に提起された作品実現の意味とセザンヌの実現の問題」は，バルザック「知られざる傑作」の分析から始まり，セザンヌが，その主人公の画家フレンホーヘルの作品未完成の悲劇と自分自身を重ね合わせていたと指摘する。セザンヌの絵画がなぜ完成しないのかを考察し，その理由は，この画家が，分節されない自然の全体性を獲得しようとしていたためと指摘する。セザンヌは，進歩の実現を追及したとし，こうした制作態度は，ジャコメッティなど20世紀の芸術家に継承される重要な理念となると結ぶ。

第3章「アルベルト・ジャコメッティに見られる実現の問題について」は，ジャコメッティがレアリテの実現を目指していたとし，その試行錯誤の過程を1935年から10年ごとに区分して検証する。ジャコメッティが「レアリテの写し」あるいは「絶対的な類似」を制作理念としていたと指摘する。サルトルの実存哲学とジャコメッティとの関連を述べ，ジャコメッティにとって空間とは虚無あるいは死を意味し，まなざしは生を意味すると論ずる。ジャコメッティが，作品においてイメージの形成と破壊を繰り返すのは，生と死の相克から生まれるとする。

第4章「自己作品制作論（1985-2001）－存在論に根ざした作品の変遷と実現への過程の考察－」は，これまでのセザンヌやジャコメッティに関する論考を踏まえ，制作者である著者自身の作品についての分析を行なう。作品の実現は，個々の作品にあるのではなく，制作行為の系列の中にあると結ぶ。

**（考察）**

結論において，これまでの議論をまとめ，絵画の制作において伏流的に扱われてきた理念実現こそが，作品を制作することにおいて最も本来的な意味を示していると結論付けている。実現を目指す制作は，人間の生とは何かを真摯に問い続ける姿勢に貫かれており，こうした点を確認することにより，今日における実現の考え方が正しく認識されると指摘している。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

作品の完成・未完成の問題が，芸術研究において特に注目されるようになったのは，1950年代に入ってからのことである。バーゼル学派のヨーゼフ・ガントナーを中心にした美術史学の領域のことであった。だが，この完成・未完成の問題を鑑賞者ではなく，制作者の立場から反省的に論ずることは例が少ない。制作者は完成を目指して作品制作を行なうものだという伝統的な固定観念が存在するからである。だが，本論文の著者は，制作者の立場から，果たして作品は完成しうるのかという根源的問いかけを行ない，完成・未完成を超えた理念実現の問題を考察対象として発見している。こうした事情を認識しただけでも，本研究の独自性と意義を認めることができる。

著者は，大学の教育学部において美術に関する科目を担当し，同時に制作者として活発な作品発表を行なっている。そうした美術の教育と制作に関する長年の経験が，この論文の土台となっている。また，一般に芸

術研究は，歴史研究，理論研究，制作研究がそれぞれ独立して行なわれているが，著者の研究は，歴史，理論，制作がバランスよく三位一体となって構成されている。特にセザンヌやジャコメッティに対する分析は，原典資料の読解も精緻であり，作品解釈も卓越している。

著者の説く主張として，特に優れているのは，理念実現を志向する制作という型が存在するという点である。こうした型の存在を意識することにより，芸術研究は，新しい研究領域を獲得するし，同時に制作者に新しい価値観をもたらすことができる。そうした意味で，この研究は，現代における芸術制作の新たな可能性をも示唆する内容を含んでいる。

以上から，本論文は，美術の歴史，理論，制作の統合研究の意義を示唆した点で独自の価値を持つものとして高く評価できるものである。本論文により，著者の研究目的は概ね達成したと考えられるが，今後は，さらに芸術の統合研究の体系化を目指して一層の努力を期待するものである。

よって，著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。